おおさか KEY わーど 第46回

古書を求めて日本たてよこ十文字

手にとれば本の手ざわりはまた格別

四天王寺青空大古本祭。晴れでも雨でも楽しい…

定期的に開かれる古書会館の古書市

春に送られてきた古書の目録をパラパラめくり、欲しい本を探したり、稀覯書や古地図、版画などの図版を眺めるのは愉しいものだ。電子書籍が話題の昨今だが、紙に印刷された“書物”には、本文の内容や歴史的価値のみならず、文字のレイアウト、装釘の美しさ、紙の手ざわりがまざりあった風合いがあり、まさに人類の叡智が結晶した総合芸術である。私のように美術に携わる人間は、オリジナルの“書物”が放つオーラを大切にしたくなる。

そうした古い“書物”に直接さわることができる古書店の存在は貴重だ、という話をすると「大阪にそんな文化が必要ですか」という自虐的な人がいてあきれるが、江戸時代以来、大阪は古書文化の一大拠点であり、今もそれは息づいている。むしろ、情報が集積する歴史ある大都市でこそ“古書”は盛んであり、歴史が培ってきた都市文化の精髄であると言える。

江戸時代の心斎橋筋は出版の街であったし、近代では、「海内の読書家、浪華に松雲堂あるを知り、足一たび大阪に入れば、必ず之を訪はざるは莫し」（幸田成友）と讃えられた古書店・鹿田松雲堂が有名である。

約180店舗が甍を並べる東京・神保町は「古書の街」で有名だ。大阪にも「古書の街」はある。日本橋筋（道頓堀以南の堺筋）はかつて「家電の街」であり、最近は「オタクの街」へ変貌したが、戦前は「古書の街」だった。織田作之助「夫婦善哉」の舞台ともなった天牛書店の天牛新一郎さんが、郷土研究誌『大阪辨』第7集（昭和29（1954）年）に寄稿した「日本橋の古本街」によると、昭和10（1935）年頃から18（1943）年頃までが、戦前の大阪の古書店の最盛期で、日本橋筋に大小の古書店64～65店が軒を並べていたという。

戦後も大阪の南北のターミナルに「古書の街」が開かれた。梅田は、昭和50（1975）年に阪急梅田駅の下に古書店9店を中心に「阪急古書の町」が開業する。江戸時代の和書から美術書、芸能書、宗教書、洋書など専門性の高い書店が集まり、「愛すべき道くさ風流川柳競べ」と題された開店時のチラシのキャッチコピーも、「袖ふれあうも古書の縁」などと洒脱なもので、来年に創立40周年の記念の年をむかえる。

難波では、昭和55（1980）年に南海ホークス（現、福岡ソフトバンクホークス）の大阪球場のスタンド下に14店が集まり「大阪球場なんば古書街」が誕生した。球場の取り壊しで歴史を閉じたが、現在4店が移転して「南海なんば古書センター」として営業している。

古書店が集まって開かれる古本市も大阪名物である。百貨店の古本市もあれば、大阪古書会館（中央区）での月例「たにまち月いち古書即売会」もある。屋外での青空市では、春と秋に四天王寺で開かれる「大古本祭」が盛況で、大阪天満宮境内の古本市とあわせて、リュックサックを背負って探書にいそしむ中高年の古書マニアであふれかえっている。

いまの学生は、古本は、インターネットで安く購入するものと思いこんでいる。確かに便利だが、店に行って実物を手にとり、書棚から発掘して、店主や店員、店で知り合った古書仲間など、古書に精通した強者たちと情報交換を愉しみながら、“書物”の世界を吟味玩味するのもまた格別である。それを若い学生に伝えるべしと思いつつ、郵便受けにドサッと襲来するカタログの群れと財布の中身を睨んでは「あぁ、かんにん」と思うことも、たびたびなり…。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蕣葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。